

平成18年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	資格取得eラーニングを活用したフリーター再挑戦支援プログラムの開発		
法人名	学校法人滋慶学園		
学校名	東京医薬専門学校		
代表者	理事長 浮舟 邦彦	担当者 連絡先	高平 敦 TEL 03-3688-6161

1. 事業の概要

本事業では、近年、学校は卒業したものの、資格取得に失敗したために就職の機会を逸し、フリーター等となる若者も少なくない現状に対して、養成校卒業生やフリーターの再挑戦支援を目的とした、資格取得、再挑戦支援プログラムの開発を行った。そして、その有効性の評価を行うため実証実験を実施した。

2. 事業の評価に関する項目

①目的・重点事項の達成状況

本事業では、若者やフリーターの再挑戦支援策の一つとして、言語聴覚士国家試験に失敗した専門学校卒業生を対象とした国家試験対策CBTシステムの開発を行った。開発した対策CBTは、自宅での個人学習が主要な学習形態であり、学校で開催される補習講義や模擬試験への参加率が著しく低い卒業生の学習環境に適したものであった。また、試験対策に有効なドリル&プラクティス形式とし、専門教員の手によるオリジナル問題と解説を整備したことで実証実験からも高い評価を得ることができ、事業として満足いく成果を達成することができた。

②事業により得られた成果

本事業では、試験対策に有効なドリル&プラクティス形式の対策CBTの開発を行った。その際に主眼を置いたのが、過去問題だけではなくオリジナル問題の利用を可能にすることであった。そのために東京医薬専門学校にて作成されたオリジナル問題1,000問を整備して利用可能とした。

出題パターンについても模擬試験的な100問出題だけでなく、30問のランダム出題や科目別の10問出題といった複数の出題パターンを設定し、学習者が自由に選択できるようにした。また、解答に付随する解説を専門の教員が作成することで学習効果の向上も図っている。

このような学習者への機能に加えて、対策CBTでは教員支援機能も重視した。利用実績データの管理、把握によって教員による事務作業の効率化や省力化を可能とするとともに、学習者の利用状況や学習結果の分析を通じて、より効率的な学習指導や支援を可能とした。さらに、教員が新たに問題を作成して追加できるようにし、対策CBTの一層の充実を可能としている。

③今後の活用

今後の活用としては、本事業で開発した対策CBTを多くの専門学校で利用してもらうとともに、協力可能な数校の間でそれぞれのオリジナル問題を共有したり、ノウハウの水平展開を進めることが考えられる。これらの活動を通じて、各校が利用できる本対策CBTをより充実したものとすることができると考えている。

④次年度以降における課題・展開

課題点としては、実証実験結果からも指摘のあった、幅広い利用法を可能とするためにより多くの出題パターンを設定を挙げることができる。またその際には、学習の時期や学習進捗やレベルに応じた出題パターンの選択順序や利用法のサンプルを用意して提示することができれば学習者のスムーズな利用を促すことが可能となると考えられる。

また、本事業で開発した対策CBTのようなドリル&プラクティス形式のeラーニングでは、質の高い問題の多い蓄積も重要となる。今後、多くの学習者による繰り返しの利用に耐えうるものとするにはさらなる問題数の蓄積が求められる。

さらに、実証実験の結果から考えられた点として、利用者に対するサポートの必要性も挙げられる。eラーニングは自宅で個人学習を行っている卒業生の学習環境に適しているだけでなく、卒業生の学習支援を行う専門学校にとってもコストの削減や効果的な学習支援の提供という点で有効である。しかしながら学習のモチベーションを維持させ、継続的な利用を促すためには、孤独な学習となる卒業生への、学校や教員によるサポートが必要となると考えられる。

3. 事業の実施に関する項目

①実態調査等

実態調査では、本事業がターゲットとした言語聴覚士国家試験について、試験形式や概要の整理を行った。また、東京医薬専門学校の卒業生からなるOB国家試験チャレンジ講座生24名(女性23名/男性1名)への事前アンケート結果の分析を行ない、卒業生の就業状況と学習環境や学習形態、eラーニングによる試験対策プログラムの前提となるPCの所有状況やインターネットを利用した言語聴覚士の学習経験についてなどの確認を行った。

さらに別章では、専門学校など高等教育機関でのeラーニングの利用状況を確認するとともに、教材別にeラーニングの分類を行い、それぞれの特徴を整理した。また、現在利用されているインターネット上の言語聴覚士試験対策サイトの機能と効果を調査し、本事業で試験対策テストを開発する上での基礎資料のまとめを行った。

②言語聴覚士国家試験対策CBTシステムの開発

本事業では、専門学校卒業生を対象とした言語聴覚士国家試験対策として、試験対策に有効なドリル&プラクティス形式の対策CBTを開発した。開発に当たって重視したのが、過去問題以外のオリジナル問題の利用を可能にすることであった。そのために東京医薬専門学校にて作成されたオリジナル問題1,000問を整備して利用可能とした。

搭載した機能のひとつとして、複数の出題パターンが挙げられる。模擬試験的な100問出題だけでなく、30問のランダム出題や科目別の10問出題といった複数の出題パターンを設定し、学習者が自由に選択できるようにした。また、解答に付随する解説を専門の教員が作成することで学習効果の向上を図っている。

このような学習者への機能だけでなく、開発した対策CBTでは教員への支援機能も重視した。利用実績データの管理、把握によって教員による事務作業の効率化や省力化を可能とするとともに、学習者の利用状況や学習結果の分析を通じて、より効率的な学習指導や支援を可能とした。さらに、教員による新作問題の追加も可能とし、利用する学校において対策CBTの充実と発展を図れるようにしている。

③実証講座

開発した言語聴覚士国家試験対策CBTシステムの有効性の検証や課題点を明確にすることを目的として実証実験を行った。対象としたのは、対策CBTを実際に利用したOB国家試験チャレンジ講座生の中より、再受験に対する意欲やIT環境、PCを利用しての学習経験の有無などを考慮して3名を選出して被験者とした。

実証実験の実施期間は平成19年1月1日(月)より2月10日(土)までとした。実施場所は、大部分の学習形態が自宅での個人学習である卒業生の特性に考慮して、受講者が自由に選択できることとした。

実証実験後の受講者の反応は、操作性については同様の学習の未経験者にも抵抗感なく受け入れられ高い評価を得た。また、早期からの利用を希望する声が見られたように被験者の反応は良いものであり、事業目的に適った対策CBTを開発できたことが実証された。

④その他

本事業では、過去問題ではなく、オリジナル問題の利用を重視した。なぜなら、本事業が対象としている卒業生は、通常、多くの過去問題を目にしているため、効果的な試験対策にはオリジナル問題による学習がより効果的だからである。また、オリジナル問題の出題を重視した理由は、過去に出題された問題が再度国家試験に出ることはないという考え方によるものである。

このような理由から、本事業では東京医薬専門学校で作成した1,000問のオリジナル問題を活用可能としたが、この、オリジナル問題1,000問の利用と、CBTの活用という卒業生の国家試験対策に適した学習方法を取り入れ、成果を残すことができた点が本事業の特色と言える。